



白門板橋

2015. 3. 15 VOL.43

編集
発行

中央大学学会 東京板橋区支部

〒173-0031 東京都板橋区大谷口北町7-5 TEL03-3956-5330



■巻頭言

新年度を迎えるに当たって

支部長 池田亘利

梅の花が咲く季節を迎えました。板橋区支部の皆様におかれましては、お健やかにお過ごしのこととお喜び申し上げます。

日ごろは支部の運営に何かとご協力を賜り、ありがとうございます。おかげさまで支部の行事も順調に進んでおります。

板橋白門会は、昭和63年4月24日に設立され、今年で27目を迎えました。長いようですが、発足当時のひとりとして振り返ってみますと、あつという間の歳月でした。本誌の編集に参加して感じたことは、長い歴史を歩んできたということです。

支部も変わりました。27年の年輪そのもので、みんな歳を取りましたが、支部の多彩な行事で親睦と協調を深めております。この触れ合いの場は、役員の方々の運営によって行われています。

支部の活動もすっかり定着し、4月の観桜会が各ブロックで交代で行われ、6月には区立文化会館にて総会と懇親会を実施し、学会本部から幹部が来賓として参加されております。

10月には板橋区民祭りで、会員の車庫をお借りしてコーナーを設け、新会員の募集を兼ねて支部のPRを行っています。同月には母校のホームカミングデーに数名が参加いたしました。

11月は恒例の秋の旅行でバスにて北茨城の平潟港に行き、アンコウ(鮫鱈)どぶ汁を食べてまいりました。12月に忘年会を実施、そして1月の新年会を例年どおり文化会館で行いました。このように、皆様のおかげで行事も順調に進行しております。

4月1日から、支部の新たな年度が始まります。

母校と支部のますますの発展と会員各位のご健勝を祈念して、新年度を迎える私の挨拶とさせていただきます。

支部のニュース

明るく楽しい新春の集い

恒例の新年会が、1月24日(土)午後6時より区立文化会館で開催され、今回は40名が参加した。

池田支部長の年頭の挨拶に続き、アトラクションとして嘶家の春風亭朝也氏が登場。その落語は素晴らしく楽しく、会員の笑いを呼び、笑顔のうちに第一部終了。



▲春風亭朝也氏の熱演

集合写真の後、関上監事の乾杯で懇親会が始まり、人数が少ないぶん、逆に皆さんの話が近くなり、歓談は酒を呼び、大いに会場は盛り上がった。

気が付けばまもなく終了の時間。岡田利彦氏が音頭を取り、全員で校歌、応援歌、惜別の歌を斉唱し

て解散となった。

なお、新年会で古典落語「子ほめ」を披露した春風亭朝也(本名、三浦祐樹)氏は、平成14年中大文学部を卒業したプロの嘶家で当支部の会員。

平成26年10月27日に行われた「平成26年度NHK新人落語大賞」の本選で、古典落語「やかんなめ」を演じ大賞を受賞した。(大野正浩)

ホームカミングデーに参加

母校では平成26年10月26日、第23回ホームカミングデーを開催。当日、徳永、小宮両氏と筆者(池田)の3人は池袋に集合、母校に向かった。

メイン会場にて板橋白門会の支部旗を立て、テーブル席を確保。そうこうする内、支部会員が集まりはじめ、ビールとお酒で親しく歓談した。

イベント「中央の絆」では、小宮氏が支部旗を持って、先頭でメインステージに登場、絆を深めた。

また、舞台上で日本舞踊を披露した藤間浩菊さんを囲んで記念写真も撮影。さらに福引抽選会では、

当支部の中路義雄氏にスズキ50ccのスクーターが当たり、楽しい一日を過ごした。(池田亘利)



▲支部旗掲げる小宮旗手

板橋区民まつりに参加

平成26年10月18日(土)〜19日(日)の両日「板橋区民まつり」が開催され、板橋白門会も新入会員募集のため参加した。



▲当支部のコーナー

前年と同様に、会員のご好意により、グリーンホール横の会員宅

ガレージに支部のコーナーを設置、人通りの多いとても目立つ良い場所です。支部旗等の設置も済ませ、さあいよいよ行動開始。

支部長・幹事長をはじめ、各ブロックの方々の積極的な参加を得て、新入会員の募集を行うことが出来た。

忘年会——和洋中料理で舌鼓

支部の忘年会が、平成26年12月6日(土)午後6時より「王華」で開かれ、29人が出席した。

大森 守ブロック長の開会宣言、続いて池田支部長の挨拶があり、佐藤道則氏の乾杯の後、歓談となった。

山本仁二氏の司会で会は滞りなく進み、佐藤 義カラオケ会長のもとで歌もうたわれ、酒が酌み交わされた。

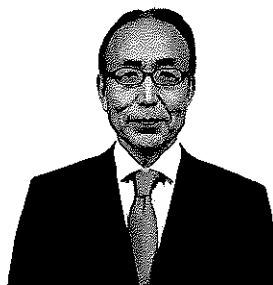
最後に岡田利彦氏の豪快な音頭で中大の三つの歌を合唱後、大野幹事長の中締めでお開きとなった。(徳永勝彦)

(※忘年会を仕切った担当ブロック長の大森 守氏は、平成27年1月19日に急逝された。関連記事を5ページに掲載)

母校のニュース

■新総長・新学長就任

中大は、2014年10月25日、駿河台記念館にて理事会を開催し新総長および新学長に酒井正三郎教授を選任した。



▲酒井正三郎 総長・学長
(写真 中央大学)

酒井教授は64歳。商学部卒業後、大学院商学研究科を経て、商学部助手、講師、助教授、教授。

総長・学長の任期は、2014年11月6日から3年間。総長と学長は、兼務。

中大では、総長は学校法人中央大学が設置する諸学校（大学を含む）や学術研究機関を総括し、学長は大学における校務を統括する、それぞれが別の機関である。

※〔資料〕中大ホームページ・『学員時報』・『中央大学の近況』を参照した。

■衆議院選挙結果と組閣

衆院選の中大出身当選議員

第47回衆院選は2014年12

月14日投票され、定数475議席の内、中大出身者は15議席を獲得した。

当派別では、自民11議席・民主3議席・共産1議席である。

第3次内閣に望月義夫氏が入閣

また、24日に発足した第3次安倍内閣の組閣では、望月義夫氏（67歳・中大法学部卒）が環境大臣・内閣府特命担当大臣（原子力防災）に再任された。

■高松高裁長官に

安藤裕子氏就任

政府は、2014年9月19日の閣議で、安藤裕子（あんどゆうひろ

こ）千葉家裁所長を高松高裁長官に任命することに決めた。安藤氏は、1973年・中大法学部卒業。

なお、高裁の本庁は全国に8か所あり、必要に応じて支部は6か所ある。
(伊藤 潤)

中大スポーツ

■箱根駅伝

中大無残な敗北を喫する

中大関係者にとつての一年は、箱根駅伝に始まるといわれる新春の一行事。

今年も屈辱の予選会から立上がつて雪辱を期して臨んだが、復路の10区土壇場で、思わぬアクシデントに襲われた最終ランナーは、タスキこそつないだものの、無残な19位に転落してしまった。19位ということは、後に一校しかないことで最下位と何ら変わらない。

■東都大学野球秋季リーグ

中大健闘するも3位

優勝した駒大に一勝二敗と善戦しながら、伏兵・拓大に星を落したのが響いて、勝点3にとどまり、同じ勝点3の国学院大に勝率で及ばず無念の3位に終わった。

沖繩興南高校から期待されて入学した島袋投手の復調次第では、十分優勝を狙えただけに残念だった。しかし、3位に終わったもののベスト9に中大から4選手が選ばれた。

一塁手 羽山弘起 18票初

遊撃手 松田 進 15票初

外野手 福田将儀 17票②

指名打者 金子大喜 11票初
(注)数字は得票数で満票は19票

■プロ野球ドラフト会議で

中大から3選手が入団

▽島袋洋奨投手・ソフトバンク5位。沖繩興南高で春夏連覇のトルネード左腕。中大では左肘痛などで苦しみ、期待を裏切った。

▽福田将儀外野手・楽天3位。

走塁技術、守備範囲の広さに定評があり、秋には右方向にも打てるようになる。東都リーグ屈指の功打者。

▽遠藤一星内野手・中日7位。

社会人の東京ガスを経て指名された。安定感のある守備と打順は3番を打った。即戦力の期待がかかる。
(平山惟美)

同好会通信

パソコン同好会 佐藤道則

便利な機能を持つパーソナル・コンピュータを、駆使できるようになりたい思いで、例会（研修会）を続けてきた同好会です。

パソコン（略称）で何が出来るのか、どのように操作すればよいのかと、基本を徹底マスターする取り組みが功を奏して、一つのサイクルをクリア出来た時点で打ち上げるタイミングでありましたが、生憎にも、使い慣れた機種XPへのサポート打ち切り・新機種セブンの登場によって、再挑戦することになりました。

幸いにも、基本的には大きな違いもなく、ツール（道具）の使用方法を習得することによって、使いこなすスピードも想定以上で、会員の多くは、研修の必要もなく、昨年の参加数が激減する状況を呈したことが、研修効果向上を如実に物語っているのではと、自画自賛できる同好会です。

誠に快哉！

（会長）

ゴルフ同好会

深山 宏

囲碁同好会

布施二郎

カラオケ同好会

佐藤 義

「ゴルフ同好会本年度予定」

1・春季大会を飯能ゴルフクラブにて、4月16日（木）に開催します。新入会員の参加を期待して5組の枠を予定しております。

2・中大人GOLF決定戦を7月10日（金）に鳩山カントリークラブで開催します。この大会は、昨年度から開催され、オール中大人のナンバーワンを決定することをコンセプトにしております。もしかしたら、久しぶりに同輩の方とプレイが一緒になるかも？

3・秋季大会を毎年9月に予定しています。コースのオープンコンペに参加し、予期しない商品がゲットできるかもしれませ

ん。
4・学員会本部大会（11月頃）に参加する予定を立てています。昨年は団体戦で同率2位。

本年は個人戦も含め、板橋白門の名を知らしめましょう。

（会長）

囲碁部は、平成2年2月に発足し、今年で25周年になります。

そして3月例会が25回目に当たります。

第1回の案内は『白門板橋』第2号に掲載されました。

スタート時は25名の愛好者が集まり、熊野町区民センターでの対局でした。

その年の12月に、中大学員会主催の全国OB囲碁大会に出場し、それぞれのクラスで優勝・入賞と健闘し、へ板橋区支部に囲碁部ありとアピールしました。その時は清水治男元部長（故人）他4名の出場でした。

そのうちのひとり、松山幸次さんは現在も例会に皆勤で、元気に対局しておられます。

現在は、20余名のメンバーで輝かしい伝統を守りつつ、毎月第二日曜日に、西池袋囲碁サロンで楽しく対局しております。

囲碁に興味のある方は、お気軽にお出かけください。

（事務担当）

年2回開催（5・10月）して

いるカラオケ例会は、昨年10月に32回を数え、発足以来16年が経過しました。

この間多くの皆様のご参加を賜り、毎回楽しいひと時を過ごせたことに感謝とお礼を申し上げます。

又、節目の開催日には参加賞や採点方式による優秀歌唱賞などの記念イベントを企画し好評でした。

◆大きな声で歌い、ブレスやピブラート、複式呼吸等有酸素運動によるカロリー消費で、ダイエット効果やストレスの解消

◆歌詞を覚えることにより、脳の活性化

◆歌詞の内容を理解して歌うことで心身がより豊かになる等のカタルシス効果が、カラオケにはあるといわれています。

参加ご希望の方は、ぜひ事務局または同好会までご連絡ください。

（会長）

白門レガッタ開催

2014年度白門レガッタが11月22日(土)、戸田オリンピックボートコースで開催された。当日は小春日和で、競技には最高のコースコンディション。

板橋区支部からは「板橋白門ボードチーム(笹沼史明・山本仁二・布施二郎・乙女幸廣選手)」が一般男子の部に出場。レース1回目は順調な滑り出しであったが、2回目にさらに早いチームが現れて入賞を逃した。



▲板橋白門ボードチーム (board team)

また、小宮仁選手は「1984会支部チーム」で一般混成の部に出場、3位入賞を果たした。競技終了後は、大学主催の懇親会となり、支部の応援団も加わり、学生とも歓談して楽しいひとときを過ごした。(伊藤 潤)

告知板

観桜会のご案内

恒例の当支部の観桜会を、次の要領にて実施いたします。

* *

日時 平成27年4月4日(土)
 集合 JR板橋駅東口・正午
 散策 駅前・桜並木
 宴会 味香春(中華料理)
 開宴 午後1時より
 会費 四〇〇〇円(当日徴収)
 担当 板橋ブロック
 (詳細は、同封の観桜会の案内状をご覧ください)

定時総会日程

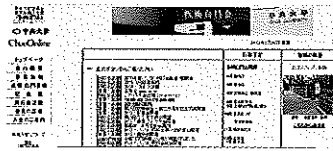
月日 平成27年6月13日(土)
 会場 区立文化会館 大会議室
 開始 午後6時より
 (総会の案内状は、後日に別途ご案内いたします)

新会員名簿発行

この度、新しい会員名簿を発行しました。前回は平成21年の発行でしたから、6年振りの新しい名簿です。個人情報保護の観点からも、取扱いは十分ご注意ください。

ホームページの検索方法

当支部はホームページでも広報活動を行っています。検索方法は簡単です。Webページの検索コーナーに「板橋白門会」と入力して検索すれば、容易に当支部のホームページを探し出すことができます。



▲当支部のホームページ

新入会員

氏名/吉田 昇(よした のぼる)
 卒年/昭58年・法卒
 住所/板橋区高島平
 趣味/水泳
 ブロック/高島平

訃報

▼佐藤啓司氏(昭33年・商卒)
 (平成25年 逝去)
 ▼大森 守氏(昭34年・法卒)
 (平成27年1月19日 逝去)

追悼文
 大森 守先輩を悼む
 山本仁二



大森 守先輩は、今年の1月19日早朝、散歩途中で突然倒れ救急車で運ばれたが、帰らぬ人となってしまった。

昭和34年中大法学部卒業後、豊島青果(株)へ入社、常務取締役を経て、高島平に卸売市場が出来るとこれを取り仕切る東京富士青果(株)の社長に就任し流通の基盤作りに貢献された。居を構えた志村では、PTAをはじめ地域活動にも尽力され退職後は保護司を任期満了まで務められた。

後輩の育成にも心を砕かれ、大変面倒見の良い先輩であると同時に、還暦になって宅建主任をはじめ多くの資格を取得されるなど、努力家でもあった。

ゴルフ、野球、水泳、登山とスポーツ万能であった大森先輩の突然の他界を未だに信じられないが、ここに慎んでご冥福をお祈りいたします。(常任幹事)

■秋の旅行■

旬のアンコウ（鮫鱈）

どぶ汁を食する旅

松島道昌

平成26年11月9日（日）、毎年恒例の板橋白門会の秋の旅行が開催されました。

今年も一人でも多くの参加者を募ろうと、これまで一泊旅行であったものを、日帰りバスツアーに変更しての企画となりました。

当日午前8時にグリーンホール前に集合、一路常磐道を北上し北茨城インターチェンジで降り、目的地まで渋滞もなく快適な往路でした。サロンバスでしたので、バスが走りだすとすぐにいつものように酒を酌み交わし、楽しい時間となります。

気心の知れた同窓の仲間が、卒業年次に関係なく時間と空間を共有できることはうれしいことです。最初の目的地は、五浦岬にある六角堂。明治時代に岡倉天心が思索の場所として自ら設計したもので、「関東の松島」の異名を持っています。景勝地・五浦海岸の中でも優れた景観を示すところに建っ

ています。

国の登録有形文化財に登録されていたこの六角堂は、2011年3月11日に発生した東日本大地震の津波の直撃を受け、土台のみを残して姿を消しましたが、震災の翌年4月には再建され、復興のシンボルとなりました。

六角堂に至る前の庭園にきれいな黄色い花が群生していて美しかったので、私が携帯で写真に撮っていると、たまたま隣におられた豊田哲夫先輩が花の名を「ツワブキ」と教えてくださいました。「艶（つや）のあるフキが転じて名前がついた」とのこと、さすがに生け花の池坊大青流家元のお話は違います。（知るは喜び）といいますが、知識豊富な先輩方と旅をする喜びをかみしめました。

次に訪れたのは、バスで六角堂から30分ほど走り、平潟港にあるアンコウどぶ汁で有名な料理屋「篠はら別館」です。

有名な北茨城のアンコウを昼食でいただけるのは最高のぜいたくです。この魚は捨てるところがな

いといわれます。「どぶ汁」とはこの地域の漁師

料理でアンコウ鍋の本来の姿だそうです。

お店の女将さんが由来を語ってくれました。

『まだアンコウが食材として知られていなかった頃、茨城県北部の漁師達が船上で食べたアンコウ鍋が始まりです。水は使わず、大根などの野菜や味噌と鍋を持ち込むだけで作れるので、船上での調理に好都合な上、何よりも栄養価が高かったため貴重でした』



▲アンコウ鍋の昼食会
(右端 筆者)

「どぶ汁」の由来は、あん肝から出た肝油で汁が酒のどぶろくのように見えるからとか、そのほか諸説あるようです。

そんな話を聞きながら鍋の煮えるのを待ち、いただいたどぶ汁の美味しかったこと、これは現地に来ないと味わえない絶品です。

ともかく美味しい。

『どぶ汁は、生のアンコウを使用するため、新鮮なアンコウを使用しなければなりません。アンコウそれぞれに水分の出方や肝の脂が違いため、慣れた人でなければ作れない料理です』と私のテーブルにいた若女将で、お店のお嬢さんが教えてくれました。

料理屋を出た後、港の魚市場に行きました。ちょうど漁船の水揚げが終わったところで、市場は競りにぎわっていました。

福島県に近い茨城県北部の漁港は、風評被害で打撃を受けているということでしたが、市場は活気を帯びていました。

最高の漁師料理と旨い酒を堪能した私達は、晩秋の北茨城を後にして帰路につきました。

帰りのバスの中で、来年もまた今回と同じような満足度の高い旅行を企画しようと誓いました。

結びに、今回の旅行に際し、ご寄付をくださった方々や、お世話になりました皆様のおかげで、楽しい旅ができましたことを心から感謝申し上げます。

（旅行幹事）

■白門出身作家シリーズ

木内 昇 文学拾い読み

『櫛挽道守』(くしびきちもり)

著者/木内 昇(きうちのぼり)
発行所/株式会社集英社

■著者プロフィール

一九六七年生まれ。東京都出身。
出版社を経て、二〇〇四年、『新選組 幕末の青嵐』で小説家デビュー。一九九〇年、本学卒業。二〇〇九年、第二回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞。二〇一二年、『漂砂のうたう』で第一四四回直木賞を受賞。二〇一四年、本作で第九回中央公論文芸賞、第二七回柴田錬三郎賞、第八回親鸞賞を受賞。著書に『新選組裏表録 地虫鳴く』『茗荷谷の猫』『浮世女房酒落日記』『笑い三年、泣き三月。』『ある男』など。

*

四年前、木内昇氏が『漂砂のうたう』で、直木賞を受賞した時に本誌(VOL・36)に取りあげているので二度目の登場である。

時代をおよそ一五〇年余りさかのぼった一八五〇年代の木曾・蘆

原宿の街道筋に櫛職人の吾助一家が住んでいた。

家長の吾助に女房の松枝。登瀨と喜和の二人の娘に直助という男の子がいた。他に通いの弟子で、太吉という若い子がいたが、修業半ば挫折。家業を継ぐしきたりになつていた長男の直助は、若くして水難事故で亡くなつていた。

代々お六櫛を挽いて生計をたてていた吾助一家で、平和に時が流れたのはわずかな期間だった。

蘆原地区には、昔から峰榛(みねばり)というすこぶる堅い樹が生育していて、梳櫛(すきぐし)の材料として用いられ、地場産業の一翼を担ってきた。お六櫛が作られるようになったのは、享保年間といわれているから、徳川八代将軍吉宗の時代になり、およそ三〇〇年も昔のことになる。

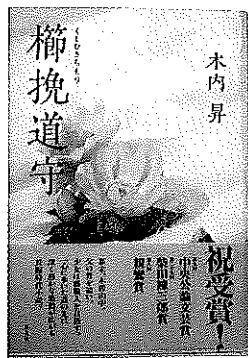
話しは前後するが、お六櫛という櫛は、木曾街道・妻籠(つまご)に住むお六という美しい娘が、初めて髪を梳いて思ひ悩んでいた頭の病が治つたということから名付けられた。と。材料の峰榛は、別称「斧折れ櫛」ともいわれ、文字どおり斧が折れるほど堅い樹で黄楊(つげ)に酷似している。鹿

児島へ旅行した時に土産に買い求めた本黄楊の櫛を思い出して、何故木曾の山中に伝統産業として根付いたのか不思議に思いながら本書を読み進めていたが、代々技を磨き伝統を継承した優れた職人がいたからだと気付いた。

単に髪を解かず粗い歯の黄楊櫛でさえ、機械挽きが主流になつた現在、お六櫛は貴重である。幅が一〇cmにも満たない櫛に一〇〇本を超える歯が挽かれ、この細かい作業を鋸で挽くのだからすごい。呼吸を整え一定の速度で一気に仕上げなくてはならない。

朝早くから夜遅くまで挽いて、間屋筋まで納品して手にするのは現金でなく翌日一家が食べる米の現物支給なのだ。

働けど働けど、暮らし向きは一向によくならない。貧しい生活が続くなかで、次女の喜和は、さつさと相手を見つけて家を出てしまう。長女の登瀨は間屋筋から持ち込まれた縁談に関心も興味も湧か



ず、成行き任せにしていると、父親の吾助が義理を欠くのを承知で、破談にしてしまうのだ。娘を持つ母親は大乗気だったが、思ってもみなかった結末に一家は大混乱に陥つた。娘の縁談を破談にして、馬鹿だ、偏屈者だとさげすまれた吾助だが、吾助には信念があった。代々継承してきた梳櫛の製造技術は、自分のものではなく次の世代に納得して渡さなければならぬ。技は誰にでも託せるものではない。櫛を挽くのは男の仕事と決めているが、「おらは櫛を挽きたい。父さまみでえに、櫛を挽けるようになりたい」と登瀨も人前はばからず号泣した。

婚期を逸しても登瀨は、父に寄り添うようにして、師匠の一挙手一投足を喰い入るように凝視して技を盗むのだった。文字が書けず読めない登瀨だが、櫛挽きに関しては天性の能力を発揮して、父親の信頼を勝ち取った上、神の計らいついともいうべき実幸という立派な青年に巡り会い、吾助の念願だった伝統の技を夫婦して受け継ぐことができ、ハッピーエンドに終わる。久し振りに重厚感のある小説に出会い満足している。

(平山惟美)

清水町

風土記稿のなかに前野村があり、その小名として清水の説明があります。そこには「此辺清水湧出し溝をなすこと五ヶ所あり、依て此名あり」とあります。

清水の町名は、ここから起こったといわれています。またこの辺は小豆沢村、蓮沼村、前野村と続く中山道の東、広大な原野で東原ともいわれていました。

地名の由来…③④

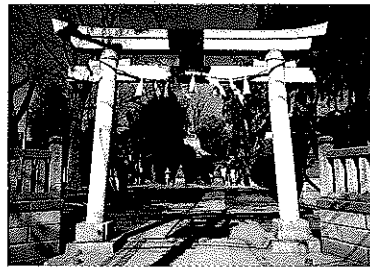
「清水町」の巻

江戸時代には、清水夏大根の産地としても有名でした。昭和七年から昭和三十年までは、志村清水町ともいわれており、現在の清水町、大原町、泉町、宮本町をさします。また、旧中山道から東に入る道は王子稲荷道で、姥ヶ橋を通って王子稲荷神社への道でした。

来②「稲荷台」の巻、参照。

近くに清水稲荷神社があります。御祭神は、豊受姫命（とようけひめのみこと）です。

創立年代は不明ですが、江戸時代の「遊歴雜記」に「老親飲めば美酒、その子飲む時は清水なり、彼地を呼んで酒泉といい、後に清水村とあらためけるとなむ」とあり、出井の泉にちなんで、この地



▲清水稲荷神社

江戸時代には、清水夏大根の産地として有名でした。昭和七年から昭和三十年までは、志村清水町ともいわれており、現在の清水町、大原町、泉町、宮本町をさします。また、旧中山道から東に入る道は王子稲荷道で、姥ヶ橋を通って王子稲荷神社への道でした。

清水稲荷神社

清水稲荷神社は、もともと出井の泉のそばにあつた小さな祠が前身で、清水稲荷と呼ばれてきました。昔から清水村の鎮守として尊崇されてきました。

境内にある清水資料館は、この

地に住んでいた板橋弥一氏の納屋が解体された時、いろいろな品が散逸するのを惜しんで、展示・保存を目的に建てられた資料館です。

収蔵品は、昭和六十一年度に板橋区の登録有形民俗文化財となっています。

境内には庚申塔が二基並んでいて、どちらにも青面金剛像が彫られています。

元禄十三年に造られたものは、唐破風笠付・日月・三猿が配されて道しるべになっています。「右大日みち、左祢里ま道」とあります。

寛政六年に造られたものは、駒形で日月・二鶏・邪鬼・三猿が配されています。

(文・写真とも 中三川孝幸)

『板橋史談』に

石塚輝雄前支部長が執筆

板橋区には、板橋史談会という団体があり、『板橋史談』という機関誌を発行しています。板橋史談会は、昭和39年に発足し、平成26年に創立50周年を迎えた由緒ある団体です。

『板橋史談』には、板橋に関する

さまざまな歴史や文化情報が掲載されています。

石塚輝雄前支部長は、第281号に「生誕一〇〇年佐藤太清・板橋区立美術館展を振り返る」、第282号に「櫻井徳太郎文庫」を執筆しておられますので、皆様にお伝えいたします。

編集後記



編集作業には、次の三つの関門があります。

一、編集企画。何を載せるかを四六時中考え、企画案を練り、編集会議で吟味する。

二、原稿依頼。執筆者に、原稿を依頼するが、断られることもある。原稿が送られてくるまで気がかり、一番つらい時期。

三、原稿の編集と編集委員による照合、印刷所への依頼、校正、完成後10人ほどで発送作業。

わずか8ページの小冊子にすぎませんが、每号心を込めて編集しています。(伊藤 潤)